

## 大江健三郎と北方少数民族

われらの内なるギリヤーク人

一條孝夫

### はじめに

私が小説家としての自分を作りあげてから、その上で、これは自分の作品だと認めることを望むもののみ収録した。私の死後、断簡零墨まで集めた全集が編まれることがないように、これを決定版としたい。それまでに私がなお新しい小説をいくつか書きうるなら、この版の補巻として加えることをここに明示しておきたい。それは私の、作品についての考え方にたつものである。

大江は、自選全集『大江健三郎小説』全十巻（九六・五、七、九七・三）の最初の月報に、まずこのように記すことで、ともすると断簡零墨の類いにまでかかずらう全集の編集者（研究者）を強く牽制するとともに、手ずから編んだ決定版にあえて載せない不出来の作品、何らかの理由で規格に合わなかった作品群の永久追放を宣したと考えられる。その意志表明に自作の完成度への厳格な査

定や大江の作家的良心を読むかぎり、主張自体は唐突であっても、かくべつ奇異な発言というわけではない。作家が思いえがく理想の全集とは本来そいつものである。

しかし、研究者の立場からすると大江の言説をそのままには受けとりにくい。これまでも大江は、『懐かしい年への手紙』（八七・一〇）のような自己言及的な作品で、旧作の系譜を引用的に解釈し直そうとするかのようなきわどい技法を用いたことがあり、系統の秩序を意識するあまり、しらずしらずそこに大江の合理化が働いているのではないか、という疑念がぬぐえないからである。もとより多年にわたる作家の文学的営為には、錯誤や曲折がつきものである。だとすれば、めざわりだからといって、現にあるものを無化することは、ときに作家的真実を歪めたり、大江文学の全貌に不自然な一貫性や連続性を付与することになりはしないか。作品を選別したり認知する基準、大江の作品についての考え方を尊重するにやぶさかでないが、取舍の断裁が見事であるだけに、いささかの危

慎を感じないわけにはいかない。

大江の初期作品に、北方少数民族に取材した「幸福な若いギリアク人」(「小説中央公論」六一・一)という佳編がある。この短編は発表当時まったく話題にもならなかったし、これまでにほとんど研究の対象になっていない。同時に発表された「セヴンティーン」(「文学界」同)が、その翌月に発表された第二部「政治少年死す」とともに、嶋中事件との連鎖反応でさまざまに政治的な誤解を惹起してセンセーショナルな扱いを受けたため、そのあおりをくって黙殺されたと考えられる。また、北方少数民族の主題は大江の作品群では珍奇で例外的な素材であるから、その主題系からはずれていることも確かである。ともあれ、一方は 決定版 から除外され、他方は大江の 作品についての考え方 に立って載録されたのである。ところが、この両作品には当初から 大江という才能の陰と陽の二面をはからずもてらしだしている<sup>1)</sup> とか、あるいは 対として書かれたのではない<sup>2)</sup> という指摘がある。事実、執筆期が重なっていることから予期できるように、大江は両作品の人物を造形するさい、明らかにその対照性を意識している。後者には、自意識過剰のセヴンティーンが、やがて第二部のテロリストへと変貌する狂信のプロセス、日本の右翼に属する政治少年の心理と行動をえがくこと<sup>3)</sup> に主眼があるのに対し、前者は二十歳になるまで日本人だと思っていた青年が、出自を知って ギリアク人のアイデンティティを獲得するまでのプロセス、その心理と行動を描いて対照的である。

民族主義にめざめた少年と民族意識にめざめた青年。両作品をとりあわせて浮上するのは、民族性(ナショナルイティ)の課題であり、民族問題(ナショナルリズム)の主題である。

二〇世紀より持ちこされた民族問題が、今や地域紛争、民族間の衝突の域から地球規模の政治的駆けひきにまで拡大している様相は、すでに周知のとおりである。各地の民族問題の対処によっては、人類の先途もまた大いに危惧される。とすれば、民族主義や民族意識の問題をふくむ民族問題のかずかずは、政治的にも文化的にも未解決の、すぐれて今日的な課題であるといえよう。本稿では、六〇年前後に大江が少数民族 ギリアク人 に注目したのはなぜか、少数民族がかかえる問題や背景を大江の小説やドラマを中心として検証し、少数民族のもつ課題の今日的な意義を確認しておきたい。

## 1

五九年一月、大江はNHKのラジオドラマ「北の島」の取材のため礼文島へわたった。島に二週間近くとどまって、鯨漁の不振にあえぐ網元衆たちから話を聞いてまわっているうちに、島全体の風土と人間の憂鬱に感染し、島の長老の話を聞きながら壁にむかって頭をこすりつけていたりして、当然のことながら狂人と見なされた<sup>4)</sup> というような悲惨な状態におちいつている。そのころは大江の不眠症および睡眠薬中毒の最悪の時<sup>5)</sup> で、心身ともに疲れきっていた。

執筆に難渋し、一種の回復不可能な、精神と肉体の衰弱<sup>(6)</sup>に耐えられない状態にあつて、そこから立ち直るきつかけを求めての旅だったのである。その惨憺たる旅を終えたとき、いつしか自分がじつに深いところで蘇生しているのを感じた<sup>(7)</sup>と記している。以来、大江は旅に出て記録(ルポルターージュ)することを第二の天性と自覚するようになる。

「北の島」は、同年三月二十日の夜に放送された。雪にとじこめられたさいはての島を訪れた一青年(作者)が、島の部落を訪ね、人々の話を聞きながら、文化から見捨てられていく辺境に生れ、生きて行かねばならない人たちの一生、ひいては日本人の運命ともいうものに考え至る<sup>(8)</sup>というシナリオで、大江自身が話者を買って出ている。これまでの放送劇形式ではなく、当時としては斬新な録音ルポ的手法を取り入れたことであるが、現在、NHK放送博物館には台本(タイトルは「北の島」とある)だけが所蔵されている。鯨の不漁つづきで寂れゆく島に、エヒノコックスが追い打ちをかける。エヒノコックスは少数の例外をのぞいて、礼文島のみあらわれる風土病である。窮境にあつて、青年たちは島の改革を志しているが、たしかな方途が見えていくわけではない。島のかかえる困難は、青年Eの次の科白に集約される、絶滅の不安となつて象徴的に表われる。

おれたちの祖先がアイヌをひどいめにあわせて、島から絶滅させてしまったわけだよな。こんど絶滅しそうなのがおれたち

だ、そついつ気がする。

礼文島アイヌを絶滅に追いこんだ島の日本人自身が、いまや絶滅の瀬戸際にある、という「北の島」の旋律を増幅して主題化したのが長編『青年の汚名』(『文学界』五九・八〇・三)である。数年来の鯨の不漁とエヒノコックスに苦しめられ、衰微の兆候を示しはじめている荒若島(礼文島がそのモデル)では、鯨漁の復活を信じてなお島を支配する長老(鶴屋老人)と、長老の支配権をねらつた網元衆、そして鯨漁にかわる新漁法を開拓して島の再生を願う青年会の三つの政治勢力の対立が顕在化しようとしている。島には本土のアイヌとは別種の荒若アイヌの伝承があり、多くの漁師たちとその家族には荒若信仰が生きている。鯨の到来を祈願して荒若指名の儀式で選ばれる神格化された少年が荒若(島民の精進潔斎の象徴で、童貞でなければならない)である。年毎に選ばれるのが通例だが、現在の荒若は鯨の不漁つづきで六年前から荒若として遇されている。長老の圧制をくつがえすため、網元衆とむすんだ青年会は、長老に盲従する漁師たちを切りくずす手段として荒若の聖なる権力を利用しようとする。これを察知した長老は島民の集まる大集会の席で、彼の情婦東原サキに荒若は精進潔斎せず、わたしと寝たと偽証させ、憤激する漁師たちに追われた荒若は、その場から逃亡する。

第二部は、長老のさしがねによって汚名をこうむり、さらに荒若信仰を政治的に利用されて決定的におとしめられたことで二重

に屈辱を味わった荒若の、長老への復讐譚として展開する。サキから、死期が近いことを自覚した長老が島とともに自滅する心算である、と聞かされた荒若は、荒若信仰の最後の荒若として長老に復讐し、鶴屋長老と荒若の特権的な二人格として荒若島の滅びに終末までつきあおう という新たな使命を実感する。鯨が島に殺到した翌朝、漂流している磯舟のなかで凍死寸前の老人が発見され、となりの理胸島の浜には胸に猟銃の一撃をあびた青年の水死体が漂着する。嫌疑のかかった長老は取り調べの終わらないうちに急死し、荒若殺人事件 はそこでたちぎえとなる。

大江はこの作品の出来ばえに納得できなかったようで、成功したとはいえない、《荒若島》と改題する用意がある<sup>(9)</sup>と表明したが、改題・改作ともに実現していない。特権的な二人格の死によって島の何が変わったかといえば、現状は何ら変わらなかった。青年会の改革はいつこうに進まず、別の資本主が鶴屋老人にとってかわっただけのことだ。大江が構想の当初から、こうしたアンチクライマックスの結末を用意していたとは考えにくい。小説の文脈からいえば特権的な二人格の死は、その特権性によって荒若島の滅びというカタストロフィーに直結するはずの性格のものであるが、肝心の後半がミステリーじみた荒若殺人事件に矮小化されたために、島全体の滅亡の悲劇が拍子抜けするような個人の惨事に格下げされてしまったのである。大江に誤算があるとすれば、荒若信仰という先住アイヌの伝承に由来する神秘的な礎材を使用しながら、登場人

物に説得的な神秘性を付与できなかったことにある。大江は島の漁民がひとしく荒若アイヌを駆逐した強い日本人の風貌を達成したゆえんを、荒若島の生活が、鯨漁をめあてに日本の全土から流れてきた者の多種多様の血を一つの血統にまとめあげた結果であるとしている。長老にもアイヌの血は流れていない。むしろ、荒若アイヌを絶滅させ、その土地と漁場を強奪した者たちの血において生きている。たとえ彼がその喪われた弱小民族の最も弱小な部族に深い哀惜の念をいだくとしても、しよせん彼らとは無縁であって、事情は荒若とて変わらない。そのことは、荒若アイヌの血をひく存在の蓋然性<sup>(10)</sup>を示しながら、それを形象できなかったことと、どこかでつながつているはずである。

大江は礼文島で取材中に、礼文島アイヌとは別の少数民族、カラフト引き揚げのギリヤーク民族の現状<sup>(11)</sup>について見聞し、その所在を知るとともに彼らに関心をもったよつである。『青年の汚名』では、とりたてての働きはないものの、長老の身のまわりの世話をする年老いたギリヤーク人<sup>(12)</sup>の下婢が登場し、どこか謎めいた雰囲気をかもしている。

かつて、漁労や狩猟、採集を生業としていたギリヤーク人は、現在もロシア連邦の黒龍江下流域と樺太に居住している。その言語は特異で、民族の系統を周辺のどの民族にも見出せない<sup>(13)</sup>といい、いまま多くの謎を秘めているといつてよい。以下、歴史学、民族学、考古学などの研究成果から得た知見によって、日本の領土に居住し

たギリヤーク人の状況をスケッチしておきたい。

ギリヤークは、日露戦争後に樺太（サハリン）のうち北緯五〇度以南の領域がロシアから日本に割譲されたさい、その南樺太に先住していた樺太アイヌ、オロツコ、キーリン、サンダーなどの諸民族とともに、日本の領土に住んでいるという理由でなくしに、あるいは自動的に、日本人に編入された。同時に南樺太への日本人の移民もはじまり、しだいにその数を増していった。二七年に樺太庁は、アイヌをのぞく他の先住諸民族を敷香（ポロナイスク）の郊外にある小さな島、オタスの杜に集住させる一方、保護政策を実施した。オタスの杜は、幌内川が多来加湾に注ぐ河口に浮かんだ砂とツンドラから成る三角州<sup>(14)</sup>で、不毛の地である。アメリカ・インディアンを不毛の居留地に困い込んだ白人政府の施策を思いおこさせる。

日本の領土に先住する民族に対して保護を謳った法律には、一八九九年に公布された「北海道旧土人保護法」があるが、これはアイヌ人を対象とする法律である。法制化には、当時アイヌのおかれた窮状と、そうした苦境におとしられた政策に対する批判によって社会問題化したために成立したという経緯がある。十三条よりなる「保護法」には、明治政府のアイヌに対する勤農政策、教育・疾病対策が盛り込まれているが、旧土人という蔑称が示すように差別のうえに成り立っていて、旧土人の言語、文化、生活を一切無視するという政策<sup>(15)</sup>の原点になった。一九〇二年以降、北海道の各地に設立された旧土人学校では、その同化政策による徹底した日

本語教育と皇民化教育によってアイヌの日本人化が進められ、その結果として、アイヌが名前と言語を奪われた事情は一般にもよく知られていよう。

南樺太の場合はどうかというと、日本の領土に居住するがゆえに日本人とみなされた少数民族のうち、樺太アイヌには「樺太土人戸口規則」や、これを改定した「土人戸口届出規則」（二二年）によって戸籍が与えられたが、対象はアイヌのみで、他の諸民族は含まれていない。この事実からギリヤーク他の諸民族が、制度的に二重に差別されていたことがわかる。樺太旧土人の同化教育もまずアイヌからはじめられ、〇九年に各所に土人教育所<sup>(16)</sup>が設けられた。三〇年に樺太庁の敷香支庁がつくられ、そこに置かれた土人事務所<sup>(17)</sup>が、オタスに集められた少数民族（アイヌをのぞく）の子弟を一括して教育するために敷香土人教育所<sup>(18)</sup>を開設。この教育所はアイヌの場合と同じく、同化教育、日本語教育を進め、彼らの言語や文化を禁圧した。一九四五年以前の南樺太のギリヤーク人は徐々に生活様式が日本化され、独自の古い習慣を失っている<sup>(16)</sup>という報告がある。

しかし、本当の意味で、少数民族の苦難がはじまるのは太平洋戦争以降である。四二年、敷香にあった軍の特務機関は、十五歳以上の少数民族に招集令状を発令し、多くが特務機関員として対ソ連の諜報活動に従っている<sup>(17)</sup>。彼らが踏査困難なツンドラ地帯の地理に通じていること、共通してロシア語、日本語、朝鮮語など数力国語に

堪能なゆえである。四五年八月九日、ソ連の対日参戦により樺太は戦場と化し、混乱のなかで邦人の本土への緊急疎開が始まるとともに、戦闘や戦災で多くの死者を出した。その悲劇的な全貌の巨細は金子俊男『樺太一九四五年夏 樺太終戦記録』（講談社、七二・八）に詳しい。戦前、南樺太にいた少数民族（アイヌをのぞく）の数は、せいぜい五〇〇人程度とみられているが、そのうちオロツコが約二五〇人、ギリヤークは約一〇〇人<sup>18</sup>である。戦時中、特務機関で働いた男たちの多くが、戦犯としてソ連に抑留され、抑留中の死者と戦死者の数は三十数名にのぼるといふ。四六年、札幌に樺太引揚団体連合会が組織されて残留者の引きあげがはじまり、四九年夏までに邦人のほとんどが樺太を離れた。このとき少数民族の多くは残留したが、一部は父祖の地を離れて未知の本土に引きあげた。

## 2

安保闘争の余燼がくすぶる六〇年夏のあとに、大江は網走周辺に住むギリヤークとオロツコに取材し、とくにギリヤーク人の過去の生活と現在の生活、未来の生活に関心をもち、多くの成果をえた。取材協力者のなかで、とりわけ恩恵をこうむったのはシャーマン（巫女）の中村チヨで、彼女から文化の感覚とでもいうべき深い知恵、そう明さを感じたという。世界的なギリヤーク語の学者であるロバート・アウステリッツが、五〇年代に二度にわたって当地で

調査をしたときにインフォーマントだったのが彼女で、頭が素晴らしく良く、人物批評、情勢判断などに鋭さがあった<sup>20</sup>と評していて、大江の観察と一致している。大江はギリヤーク・オロツコの数家族が、父祖の地の樺太を棄てて北海道にひきあげてきた<sup>21</sup>次第を聞きとっているが、アウステリッツの調査によれば、中村の家族は、四七年に樺太から北海道に引きあげ、二年ほど岩内に住み、その後子供二人とともに網走に来たということである。最終的には、ギリヤークとオロツコの数家族が網走およびその周辺に居住することになったのである。

この旅行のあと、大江はテレビドラマ「オタスの森 われらのなかのギリヤーク人」の台本を書き、同年十一月六日にNHKの教育テレビで放映された。現在、NHK放送博物館には台本（第二稿）が所蔵されているが、映像は残されていない。当時の番組案内には、網走の近くに敗戦のためカラフトから引き揚げてきた三十人ほどのギリヤーク人がいる。彼らは周囲の人々から土人あつかいにされいるいるな圧迫も絶えない。少数民族の悲しみと彼らの明日への希望をテーマにしたもの<sup>22</sup>とある。台本のはじめに演出への作者の注文があつて、夏の始めから終りにかけて展開する事件を中心に網走、釧路周辺において演出すること、登場するギリヤークのシャーマンは現実のシャーマンがその役割をになうべきむねを指示している。台本のページには上下に画面と音声の欄があり、三三の場面によって構成される。網走の海近くで三世代が同居する、ギリ

ヤークの川上家の家族を中心とする物語である。釧路海岸のビデオによるロケと、札幌局のスタジオ制作で作られた。浜のシーンのロケは、本来なら網走になるはずが、マイクロウエープの中継設備の都合で釧路で行なわれ、波の荒い益浦海岸でのロケは予想以上の効果をあげた<sup>(23)</sup>というのである。また、ギリヤーク人が登場する、シヤーマンに大漁を祈ってもらうシーンや、ギリヤークの祭りのシーンには、作者が指示したように、実際に中村チヨら一〇人のギリヤーク人が直接参加しているのは、むしろドキュメンタリーのような効果を期待してのことであろう。

川上家の家族構成は、祖父・父・母・少年・(少年の)姉と兄安吉の六人。一家はギリヤークであることによって、周囲から差別の視線にさらされている。姉はギリヤークというだけで離婚された過去をもつが、秋田にいる前夫から会いたいという手紙が届いたことで心理的葛藤を余儀なくされる。出自に誇りをいだく家族のなかで、安吉だけが惨めなギリヤークの境遇をさらって家にもよりつかない。ある日、父がトツカリ(ゼニガタアザラシ)猟で網元にやとわれ、親舟についてオホーツクの海に磯舟で出猟する。ところが、トツカリの大群がいる海域は潮の流れが早く危険であったため、親舟においてけぼりにされた磯舟は転覆し、近くの浜に父の死体が漂着する。この父の死によって、川上家の内情はにわかに暗転する。

父の死後、祖父が一家の精神的な支柱となる。樺太でもおれたちは土人保護法などといって、土人あつかいされていた。ギリヤーク人

はアイヌよりも古い、オロツコよりも古い、たぶん日本人よりも古い民族だ。とにかく樺太のオタスの森で、みんなが集って暮らしていた時分には暮しに困るということとはなかったよ。それが敗戦で、えれえ苦勞して北海道にひきあげても、オタスの森はねえ。鮭やマスのとれるホロナイ川もない。という祖父の、矜持と屈辱感のいりまじった科白に一家の苦境が露出する。今のままじゃ、ギリヤークは日本にひきあげてきて滅亡すっぞ! という悲鳴のような危機感が一家に暗雲となつてたちこめるのだ。祖父は、息子の骨を埋めるだけのちつぽけな土地さえ所有していない情けない現実から脱却するには土地がいると考え、ギリヤーク人のための土地の入手を提案する。

その土地をひるげて行って、ゆく／＼はギリヤーク人みんなそこに住む、そして第二のオタスの森にする。という夢である。祖父は釧路支庁の拓殖課を訪れ、開拓地の入手について相談する。そこでドン底開拓農の実態を聞かされるが、ひるまずに交渉し、入植地の申請にまでこぎつける。あとは労働力と金の問題である。姉の前夫が来訪し、結婚を反対した秋田の家を出て二人で暮らしたい、就職口も見つけた。一緒に行かないかと誘われて姉の心は動くが、開拓地に行く労働力が足りないことを理由に断る。事情を知った安吉は、労働力には自分があるといて、姉を再婚させる。入植申請の許可があり、祖父は網元に五年期限の借金を申し込むが、ていよく断られる。が、父を荒海に置き去りにした網元の非を知る漁師や船員たちが、網元と対決してその責任を追及したことから、借金のおどが

く。開拓地の林のなかの広場で、シャーマンを中心にギリヤークの人たちが土地をきよめる儀式を行なっているお祭りの場面、安吉が設計図をひろげて土地を見わたしながら、ここにサイロ、あすこに牛舎を建てよう、酪農経営でいくぞ、大牧場にするぞ と力強く叫ぶところで、ドラマは終わる。

第二のオタスの森を建設するという、ギリヤークのユートピアの前提になっているのは土地問題である。海や川で海獣の狩猟や漁労にたずさわる彼らにとって、区々たる地面の所有が問題になるのは皮肉のようだが、これを裏つける事実として、すでにアイヌにその先例がある。「旧土人保護法」によってむりやり土地をもたされたアイヌは、本来の生活基盤を略奪されたうえに、不毛の土地での農耕を強要され、貧しさから土地を売って急速に貧民化していった。<sup>(24)</sup> 大江が『青年の汚名』で、島に和人がわたってきて共存した時期に、荒若アイヌが 大量な失地をやむなくされ、それが後年のまっつき滅亡の遠因となった としているのも、そうした歴史的背景があったことである。地面までも失えば、少数民族の生存は保障されないのである。

予想される楽土建設の苦難はともかく、祖父が開拓地の入手に意欲を示したことに、ギリヤークのプライドを見るだけでは十分ではない。土地を手に入れなければ、わしらギリヤーク人はほろびてしまふ、日本人としても樺太からひきあげてきた貧しい日本人としても、わしらはほろびてしまふ と危機感をつのらせる祖父の科白に留意

すると、ギリヤークとしても、日本人としても、という意識の二重構造がおのずと示しているように、彼らはすでに日本人への同化を宿命として受容している気配が濃厚である。一方の民族があまりに巨大であると、弱小な民族をほとんど完全に滅ぼしてしまうのが歴史的必然であるとすれば、北海道じゅう、日本じゅう探したってギリヤーク人は二十人くらいだ という少数民族の将来は見えている。しかし、彼らはギリヤークの誇りをもちながら、日本人でもあるとする道を選んだ。前夫と一緒に、横浜にある混血児の学校の農場を管理する仕事についた姉は、混血児のために働くことに生きがいを見いだし、混血児というと、

い  
どの民族の血がまじっているなどということはどうでもい

この小さい不幸な日本人が幸福にならなければ、日本の子供みんな幸福にならないという気がするんです。わたし、あの人とのあいだにギリヤークの血の流れている子供を生みます。混血の子供たちと一緒に育てます。どんなに辛くてもそうします。

という決意を家族に伝えている。ここには、混血(複数民族の混成)を自明とする主張があつて、多民族の共存から多文化主義へと敷衍される思考の萌芽がうかがえる。ことはギリヤークの問題であるけれども、日本人の課題でもある。大江がドラマの副題を われらのなかのギリヤーク人 としたゆえんである。

この年の芸術祭参加ドラマ「オタスの森」は、そのテーマに加え

野外ビデオシーンが効果をあげたこともあって、ある新聞の番組総評では、参加作品二六本のうちのベスト5に選ばれている。<sup>(25)</sup> 大江はこの作品を少数民族の人たちへのオマージュとして書いたのであるが、当の オロツコ人もギリアク人も、たれひとりテレビをもっていない筈だった。あの宏い北海道の片隅の数家族のギリアク・オロツコ人たちは、かれらをおとずれたひとりの若い日本人が、かれらに送った励ましの言葉を結局は聞かなかつたにちがいない。<sup>(26)</sup> と記していて、大江の 励ましの言葉 が実際に彼らに届いたかどうかは不明である。

## 3

「幸福な若いギリアク人」は、アメリカ・インディアンのように皮膚が黒く硬いのでインディアンとよばれている二十歳の製材工が工場のまへの黒褐色の土層のむきでている広場で子供らと一緒に、しゃがみこんで、一頭の樺太犬を見まもっていた。という暗示的な一行からはじまる。夏のおわりの夕暮の光のなかで、インディアンと呼ばれている青年は、あたえられたトツカリの臍物を喰っている樺太犬の様子に気を奪われている。やがて臍物を喰いつくして不機嫌になった犬が、子供たちに怯えを喚起したのを察知した青年は、犬にむかつて「カア、カア、カア、カア、トウ」と呼びかける。十日ほど前から彼の様子をつかがつて 見つめている男 が、それを聞きと

がめ、「おまえは、ギリアク人だ」と断定する。いわれてみれば、犬にむかつて発した無意識の言葉を、思い出そうとしても出てこない。ずっと昔、幼児のころに使った言葉だからだ。すっかり度を失って、工場ではみんな、おれのことをインディアンとよぶよ と応じると、男は次のように決めつける。

インディアンとおなじさ、保護区があつたんだ、樺太の敷香のオタスの森だよ、そのインディアンということだろ？ なあ、おまえはよう、樺太からひきあげてきたんだろが、オタスの森から、よお？

男から逃げるように帰宅した青年は、母親からはじめてその出自を知らされる。このときはじめて、青年にとつて既知のことながら、昭和二〇年（一九四五）の冬、樺太（の敷香）から引きあげてきたこと、五歳の幼児として、母親におぶわれ、二人きりで稚内に引きあげ、道東の市に移ってきたことが、彼の ギリアク人 である事実と重なる。私見によれば、この青年のイメージは大相撲の往年の横綱、大鵬をヒントにして形象されたようである。大鵬こと納谷幸喜は、四〇年五月に樺太の敷香に生まれ、四五年八月、すなわち五歳のとき、家族とともに北海道に引きあげ、道内を転々とした。この履歴は年齢、境遇とも青年のそれと一致する。しかし、彼の父親は白系ロシア人で、ギリヤークではない。にもかかわらず、大鵬が青年のモデルになりえた経緯を、以下に見ておきたい。

大鵬は六〇年の一月に大関に昇進した。昇進から一カ月後の一

二月三〇日、大江は対談のため、隅田河畔の料亭で大鵬と会っている。当の小説は、翌年の「小説中央公論」一月号に発表されているが、出版慣行からすると対談より前に刊行されているはずだから、本人から直接聞いた敷香の話や引きあげ時代の話は、当然のことながら作品には反映していない。大鵬は対談のあと、樺太から引きあげた年月とか、兄のこととか、ワシのことをワシよりよく知っている<sup>(27)</sup>と驚いているから、かえって大江の事前調査の周到さがうかがえる。石井代蔵『数奇な運命の星の下に 大鵬幸喜半生記』（ベースボール・マガジン社、八八・三）の第一章には、自立の道を求めて樺太にわたった母キヨの、戦争をはさんで、亡命ロシア人との結婚から、引きあげ後、子供のために再婚を決意するまでの起伏の多い人生が、大鵬の兄や姉などの証言をまじえてなまなく語られている。敷香の郊外で牧場を経営していた大鵬の父、ポリシコ・マリキヤンは、豊原にあった特務機関に強制されて諜報活動に従事していたが、戦時中に音信不通となる。一家が引きあげたあと、豊原にいたという目撃証言があつて、四六年末までの生存が確認されているが、その後の消息はわからない。白系ロシア人であり、日本軍に協力した戦犯であつた以上、ソ連治下の樺太にいて安穩な境遇にあつたとは考えられない。ギリアク人の青年の場合も、父親がシベリアの抑留所で死んだのは、戦争中に、軍隊の特務機関にいたからであつて、大鵬の父も少数民族の男たちと酷似した状況にあつたといえる。敗戦で引きあげてきた大鵬自身もまた、貧しい戦争被

害者の一人である。大江は対談に先だつて、かれとおなじ体験をしてきて、いま北海道の荒地をたがやしている青年は多いだろうと予測し、大鵬とて相撲との幸運な出会いがなければ、それらの青年とおなじ生き方をしたのだ<sup>(28)</sup>と断じている。樺太生まれの大鵬の事例を、少数民族の青年に置きかえれば、土地を所有していない彼らは、カマボコ工場につとめたり、製材工場ではたら<sup>(29)</sup>かざるをえないのである。

さて、二〇歳になるまで日本人だと思い込み、製材工場で労働組合を造ることに夢中だった青年にとつて、急に、ギリアク人だといわれても当惑するばかり。母親に教えられてシャーマンの老人に会いに行く途中、通りすがりの日本人に、かつて感じたことのない、居心地の悪い、疎外感をおぼえる一方、はじめて会う、ギリアク人には恐怖とともに、強い好奇心も芽ばえている。美幌の療養所にいる片目の川上揚岩<sup>(30)</sup>さんを見たたん、顔の皮膚の色、頬骨、眼、まっつけ、頭の形と髪の色から、自分と同族であることを直覚して不意に、激しい幸福感に包まれる。老シャーマンに年齢を教えるとき、おまえはギリアク人でいけばん運の良い、晴れ男、だといわれる。二十歳までなあ、自分のことをギリアクだと知らずに育つた男を、晴れ男というんぞ、そいつは運が良い、凄く幸運の星まわりよ、ギリアクの者はみな、そういうぞ。こついわれた青年は、先ほどシャーマンを見た瞬間に感じたときと同じように激しい幸福感を味わう。この緊張と感激に満ちた体験は、かれが民族の正統性（ア

イデンティティ)を受容して、ギリアク人として再生した至福の瞬間でもある。このあと、シャーマンから民族の歴史・風俗(伝統文化)について教えを受けるのも、青年にとっては種族への一種の加入儀礼にほかならない。老人はさらに自らが片目になった因縁にふれ、戦時中、特務機関にいて抑留されていたとき、同じ房にいたギリアクに、わしの右の眼を潰させたところ、同族の全員が釈放されたという。シャーマンのわしに喰いついておる病気は、ギリアク人みんなの病気のかわりぞ、わしが死んだら、おまえらの暮しも楽になるかしらん という代受苦が、母胎を苦しめて生まれてくるシャーマンの負うべき責め<sup>(31)</sup>であるのに対して、晴れ男は存在自体が自他の幸運を招きよせる。翌日から青年は、自分の人間が変わってしまい、樺太の方を眺めていると、体の奥底、心の奥底まで自由なもの で満たされているのを感じる。

《おれは幸運の星をいただいた晴れ男だ、二十五になったら向うへ行って嫁をつれてこよう、ギリアク人の娘だ》かれにとつて今ほど、世界がこのましい場所に思えることはなかった。

青年は民族のアイデンティティを獲得して、日本にいてもいいし、樺太へわたってもいい 選択の自由をしたとき、あえて、ギリアクとして日本で生活する道を選択している。日本という現実の中で「少数者」として生きてゆくこと<sup>(32)</sup>を選んだといいかえてもよい。この青年と対比的に登場するのが、自国の現状を嫌って、ひたすら「ここより他の場所」『叫び声』六二・一一へへの脱出を志向

する日本人の若い退職者、あの 見つめる男 である。彼は青年を操船術にたけた、ギリアク と見こみ、磯舟で海峡を横切つて向うへわたしてくれ、ソ連領へわたしてくれたら、報酬(退職金)をやるうという。青年は男の望みを、ギリアク の誇りにおいてかなくてやる。しかし、この男がなぜ日本脱出を願うかといえば、日本みたいな厭らしい所にいられるか、こついう汚ない所で死ぬまであぐせく働けるか といういたつて感覚的、情動的な理由であつて、その厭悪には自国と永遠に縁切りするほどのさしせまった事訳が感じられないし、説得力もない。この時期の大江は、日本脱出を願う青年というモチーフを強迫観念のように繰り返しかえし用いている<sup>(33)</sup>が、その発想の根拠になつているのは、日本の青年に希望がなく、反行動的な沈滞に身を沈めるほかなにもできないのは、外国軍の日本駐留に本質的に原因している<sup>(34)</sup> というテーゼである。男の前職が、アメリカ軍の 基地の仕事 であつたのも偶然ではあるまい。

ところが、大江のえがく停滞する青年たちの状況は、六〇年夏のことである。皮肉にも、現実が小説世界を凌駕して大江のテーゼは破綻するのである。そうした経緯もあつて、それまでの退嬰的な青年像からは想像できない、自他の幸福を招きよせる 晴れ男 のオプティミズムがはじめて可能となつたといえよう。ちなみに 晴れ男 はギリヤークの習俗ではなく、「セヴンティーン」の 雨男 の発想を逆用することで生まれたようである。あの孤独で、自意識過剰の

オナニストの少年に おれは《右》だ！ という決定的な回心が起こるのは、皇道派の逆木原国彦の演説会においてであった。逆木原の演説の声が、あたかも少年自身の内心の声と二重写しになって、魂が叫んでいるかのように聞こえたことから、回心は決定的となる。逆木原が堅固な少年愛国者を発見して、君こそ 真の日本人の魂をもっている選ばれた少年だ と請けあつたとき、後継者としての将来もまた約束されたのである。

この逆木原には、しばしば雨の日に演説会をひらくという習癖がある。サクラとして仕事にあづけた日傭労務者を動員できるというのがその理由であるが、演説会場では、天がその忠誠に感じて末世を嘆く涙の雨をふらせるのだとつぶいいて 尽忠の雨男 を自認している。彼の後継を約束された 選ばれた少年 は、忠とは私心があつてはならない という原則を把握して天皇絶対主義者へと変容したとき、同時に 尽忠の雨男 をも継承したはずである。しかし、国会デモの乱闘のさなか、少年が 黄金の光輝をともなつて現れる燦然たる天皇陛下を見る唯一人の至福のセヴンティーンだったにせよ、他者を拒絶する、その孤独な陶醉は、自他の幸福を招来する晴れ男 の至福とはおよそ縁遠いものであつたことは、いつまでもない。

## おわりに

戦後、南樺太から引きあげてきたギリヤーク、オロツコの人たちは 晴れ男 の家族と同様に、なぜか 北海道北東のオホーツク海岸にある、人口四万たらずの市、網走とその周辺に住むようになる。一〇年代、網走川が海にそそぐ河口近くの砂丘で、米村喜男衛によつて貝塚が発見され、モヨロ貝塚と呼ばれた。その後、多くの考古学者たちによる精力的な遺跡の発掘・調査から、五世紀から一〇世紀ごろまで、南樺太から、オホーツク海に面した北海道、南千島の沿岸部へと広がる高度の漁労、狩猟、採集を基本とする文化圏が存在したことが明らかに、オホーツク文化と命名された。<sup>35</sup>モヨロ貝塚もその遺跡の一部である。日本の考古学史上、数ある劇的な発見のなかでも有数の発見といえるが、オホーツク文化圏の遺跡の発掘・調査に生涯をかけ、功名を競いあつた考古学者たちの研究活動をスリリングに展望した書物に、司馬遼太郎『オホーツク街道』（朝日新聞社、九七・二）がある。司馬は考古学者の野村崇の案内でオホーツク文化の遺跡をめぐり、臨場感あふれる報告をして遺憾がない。このとき司馬の関心は、遺跡への考古学的な興味もさることながら、文化の担い手であつたオホーツク人とはどういう民族であつたのかという謎の解明にあり、豊かな想像力をめぐらして自説を披露している。

このオホーツク人の出自については従来さまざまな説が唱えられ

てきたが、現在ではウルチ説、ギリヤーク説、樺太アイヌ説など、沿海州、極東、樺太に先住した北東アジア系住民説に集約されつつあるようである。<sup>36</sup>人骨の特徴、イヌ・カラフトブタを飼っていたこと、靺鞨・女真系統の遺物の残存がその有力な根拠になっている。現段階では、オホーツク人の原郷が樺太あるいは黒龍江下流域にあり、彼らは、樺太から北海道のオホーツク沿岸（北の稚内から南の網走まで）に移ってきたと考えられている。以上の条件から、具体的に浮上してくるのがギリヤークである。司馬もオホーツク人に一番近い民族を、ギリヤークと推定している。ただし、当時、黒龍江下流域に居住していた民族で、オホーツク文化に直結する靺鞨人や女真人と、ギリヤークとの関係性についてはいまだ実証できない要素があり、確定にはいたっていない。ともあれ、現在もっとも有力な仮説にたてば、北海道の沿岸部にオホーツク文化を残した民族はギリヤークということになる。大江は、はじめ北海道の各地に引きあげてきたギリヤークやオロツコが、とくに横の連絡があったわけではないのに、たいていの家族がしだいに網走やその周辺へ移ってきた事実<sup>37</sup>をふまえて、かつての父祖の海見える土地へと移ってきたのだ<sup>38</sup>としているが、オホーツク文化の担い手がギリヤークだったとすると、彼らも、大江の小説・ドラマの主人公たちも、まさに遠い時間を超えて、父祖の故地へと帰還したということになる。

考古学の教えるところでは、北海道のオホーツク文化は、前半は

縄文文化と、後半は擦文文化と併存し、接触、融合をくりかえしながら、後続文化に吸収されていったとい<sup>39</sup>う。当然のことながら、各文化の担い手もまた、他民族と接触、融合をくりかえしながら共存し、民族の興亡に立ちあつたといえよう。これまで検討したように、大江は、日本人の現実の中で、民族意識を大事にして生きてゆく決意をしたギリヤークの姿を希望的にえがいた。多数者の中で少数者の文化が対等に存在することの困難を思えば、結末は楽天的にすぎることになるかもしれないが、少数民族を同化や排除の対象としてではなく、肯定的にとりあげた意味は小さくない。現実には、ギリヤークばかりか他の諸民族とも共存してきた実態がありながら、日本の単一民族国家観によって存在を否定されてきた諸民族の復権の意義を担っているからである。六〇年代の大江に、すでに多民族国家概念を先取りしていた<sup>40</sup>という評価があるゆえんである。一つの国に、複数の民族が同時に存在することが常態となっている現在、異質性の共存が現代の重要な課題であることは論をまたない。多くの民族と接触、融合をくりかえしてきた日本の歴史にかんがみれば、われらの内なるギリヤークの存在は、課題にこたえる多くの示唆を内包しているはずである。

## 注

- (1) 篠原茂『大江健三郎論』(東邦出版社 七三・五)
- (2) 川村湊「北の人」(『群像』特別編集、九五・四)
- (3) 自筆「年譜」(昭和文学全集、開高健・大江健三郎、角川書店、六三・六)
- (4) 「第五部のためのノート」(エッセイ集『厳肅な綱渡り』文藝春秋、六五・三)、他に「結婚および死」(『新潮』六〇・七)などにも同様の記述がある。
- (5) 「エヒノコックスとギリアク人」(『旅』六二・七)
- (6) 「礼文島」(『読売新聞』夕刊、五九・三・二五)
- (7) 注(6)に同じ。
- (8) 「ききもの、みもの」(『朝日新聞』五九・三・二〇)
- (9) 注(3)に同じ。
- (10) 『青年の汚名』第一部に、和人の若者と荒若アイヌの娘とにたひたひ恋愛関係ができあがったという記述があつて、アイヌの血をひく存在が誕生する可能性を示唆している。
- (11) 「三番組が登場 芸術祭参加テレビ」(『朝日新聞』夕刊、六〇・一・六)
- (12) 大江は「ギリアク」と表記しているが、一般には「ギリヤーク」が用いられる。民族学の資料によれば、黒龍江流域の民族自称はニヴフ、樺太の民族自称はニクンである。
- (13) 菊池俊彦「序」(『日本民俗文化資料集成』北の民俗誌 サハリン・千島の民族『三一書房、九七・一一])
- (14) 谷内尚文『樺太風物抄』(七文書院、四四・二)
- (15) 川村湊『海を渡った日本語』(青土社、九四・一二)
- (16) ロバート・アウステリッツ「まえがき」(中村チヨ口述、村崎恭子編、ロバート・アウステリッツ採録・著『ギリヤークの昔話』北海道出版企

画センター、九二・一一)

- (17) 田中了「少数民族をめぐる課題」(札幌学院大学文学部編『北海道と少数民族』札幌学院大学生活協同組合、八六・一二)
- (18) 服部健・横尾安夫「ギリヤーク」(前掲『北の民俗誌』)の服部の調査データによれば、四二年のギリヤークの人口は、男五三名、女四九名、計一〇二名である。
- (19) 「ギリアク人のシャーマン 網走の調査」(『東京新聞』夕刊、六〇・九・二四)
- (20) 注(15)に同じ。
- (21) 注(5)に同じ。
- (22) 注(11)に同じ。
- (23) 注(11)、(22)に同じ。
- (24) 21世紀研究会編『民族の世界地図』(文藝春秋、〇〇・五)、麓慎一『近代日本とアイヌ社会』(山川出版社、〇二・一一)
- (25) 「芸術祭テレビ番組総評」(『朝日新聞』六〇・一一・三〇)
- (26) 注(5)、(21)に同じ。
- (27) 大江健三郎「樺太からきた横綱候補」(『毎日グラフ』六一・一・二九)
- (28) 注(27)に同じ。
- (29) 注(5)、(21)、(26)に同じ。
- (30) 「エヒノコックスとギリアク人」(前掲)によれば、結核を病んで療養所にいたギリヤークの老人がそのモデル。この片目の老シャーマンの逸話を効果的に用いている。
- (31) 老シャーマン(川上揚若)は青年に、ギリアク人にふりかかる不幸が魔物の仕業であつて、それにうちかつためにはシャーマンが犠牲になるほかない おきてについて語っている。
- (32) 川村湊『戦後文学を問う その体験と理念』(岩波書店、九五・一)
- (33) ラジオドラマ「北の島」、『青年の汚名』から『叫び声』(六一・一一)の呉鷹男のエピソードまで、ひんばんに表われる。「礼文島」(前掲)によれば、大江が礼文島に滞在中、日本から脱出することを危惧した友人

から、その無謀を止める電報がとどいたという。日本脱出願望は、当時の大江自身のオプセッションと化していた事情がうかがえる。

(34) 「孤独な青年の中国旅行」、『文藝春秋』六〇・九

(35) 野村崇『日本の古代遺跡 北海道』(保育社、九七・二)

(36) 宇田川洋『謎の海洋民族 オホーツク文化のルーツを求めて』(一光社、八四・二)および、注(35)に同じ。

(37) 樺太から引きあげてきたギリヤーク、オロツコの人たちが網走に移り住んだ事情について、米村喜男衛『モヨロ貝塚 古代北方文化の発見』(講談社、六九・一〇)は、四四年、南樺太の調査旅行で彼らと身近に接し、相識ったことが縁となりこの地に生活を営んでいる」と記している。

(38) 注(5)、(21)、(26)、(29)に同じ。

(39) 注(35)に同じ。

(40) 注(2)に同じ。